

# 鬼・鑄劍・文学革命

## 魯迅の文学復古と悪趣味（上）

ヤオ イミン

### 1. 神劍伝説

かつて白樂天の詩にはある神劍と出会った物語が残されている：「<sup>おうやし</sup>欧冶子が死んで千年の後、ある精霊は暗に<sup>ちようあきゆう</sup>張鴉九という人に（その技を）授かった。鴉九は<sup>あきゆう</sup>呉の山で劍を鑄造していたとき、彼は天に日時を与えられ、そしてその功は神からの借りで成したのだ……」<sup>(1)</sup>

この欧冶子という名の人物は『呉越春秋』や『絶越書』などの古書に記載された伝説の鍛劍師であり、該の典故を引用した白樂天が次に語った話は欧冶子ではなく彼の弟子である<sup>かんしょう ぼくや</sup>干将・莫耶夫婦が鑄造した神劍・<sup>ぼくやけん</sup>鑢劍のことである：「金鉄がその精を騰落させ火は焰を翻り、踊って<sup>は</sup>躍ねて鑢劍になることを求めるのだろう。」干将・莫耶夫婦が神劍を鑄造していた際に、干将は最高の材料と最適な条件を整えたが、しかし「金鉄の精」がなかなかうまく溶けず、三ヶ月たっても完成できなかった。干将はこの現象に惑い、原因は知らなかったが、そのとき妻の莫耶が答えたのは、「神物を<sup>な</sup>化すには、人も必須な要件になっているのだ。」これを聞いて干将はかつて師の欧冶子が夫婦で炉中に身を投げて鉄を溶かした昔話を思い出し、そして他の鍛冶師たちも

皆葬式を行うほどの作法で炉を開き始める習慣もあり、それが原因ではないかと考えていた。そこで妻の莫耶が自らの献身を決意し、自身の爪と髪を爐に入れ、さらに童男童女三百人に吹子を吹かせたところようやく金鉄を溶かし、神劍を完成させた。<sup>(2)</sup>

前掲の伝説が記載されている『呉越春秋・闔閭内傳』は後漢時代に編纂された、春秋時代にある呉と越という二つ国の歴史を語る書物だといわれている。物語の内容から見ると、少なくとも当時の人々が「劍」についてただ一振りの兵器ではなく、聖なる次元にある存在として考えていたことは明らかである。<sup>(3)</sup>そこで、劍の鑄造は単純なものづくりではなく、鬼神の功を奪う儀礼でもなる；劍の神話は劍士の技と心性によって創られたのではなく、劍の鑄造とともに神話はすでに始まっていた；さらにこの神劍伝説は書き物に佇まず、歴史の霧を貫き、神話が伝った時代から伝わってきた時代、そして次の時代へと伝わっていた。

東晋の志怪小説『搜神記』はこの伝説をさらに発展させ、一つの歴史復讐劇と成した。鍛劍師が鑄造された神劍は実際に二本があり、陽劍は干将といい、陰劍は前期白樂天の詩で語った鑢劍という。干将は雄劍の存在を隠蔽し、雌劍のみを国王に献上

した。1926年、北京の大惨事<sup>(4)</sup>で厦門大学に拠点を移動した魯迅は小説『鑄劍』において、干将の息子・眉(び)間(かん)尺(せき)が16歳になる日を始め『搜神記』の伝説を現代小説に再編した：

ネズミが嫌い、しかし一匹のネズミを殺した後直ちに後悔した眉間尺は母から真相を告げられた。16年前、神劍の鑄造に選ばれた父が、自身が天下無双の神劍を造ったことにより多疑な国王の殺意を招くと確信し、雌劍の献上日に身籠った妻に復讐の任を託した。国王も、彼が予想した通り試し切りとして彼を殺害した。身の上話を聞いた眉間尺は怒りに満ち、自らの優柔不断な性格を改めることを覚悟し、父の仇を討つと決意した。

しかし国王も刺客の襲来を夢で予見し、指名手配をかけた。すでに変装し、都に着いた眉間尺はその指名手配の凶形を見るや否やすぐさま逃げ出したが、途中である黒い男と遭遇した。黒い服の人は眉間尺がすでに密告より通報され、彼の復讐計画も徒勞に終わったことを伝えた。眉間尺の父の仇をよく知り、自分は復讐の名人として仇を討ってあげたいと自称した黒い男は、条件として眉間尺の頭及び雄劍を一方的に要求した。自力の復讐に絶望した眉間尺は男を信じる以外何もできず、雪恨のため直ちに神劍を以て自決し、自身の頭を黒い男に差し上げた。

眉間尺の頭を受領した黒い服の男は奇妙な歌を唄って去っていき、道化術士と化かして王様の宮に入った。つまらない生活に退屈した王様は男が面白いものを見せると

いう嘘に騙され、宮中に巨大な金鼎を設けお湯をわかした。そこで男は眉間尺の頭を鼎に入れた。呪文によって頭顱はまた奇妙な歌を歌い始め、踊りながら王様の偉業を礼賛し、彼を誘惑していた。

この奇妙な見世物に魅了された王様は黒い男の讒言に乗っ取られ鼎の傍に近寄ったが、その隙間を見て男は神劍で王様の首を斬り、鼎に落とした。落水した首と眉間尺の頭顱は仇同志であるため、即座に死闘がはじまった。宮中の人々はこの暴挙に驚愕していたが、この不思議な光景を前に誰も動かなかった。しばらくすると王様の頭顱が有利な地位を占めていたが、戦況の不利を測った黒い男はさらに自分の首を斬り、頭顱の戦いに参入した。そして王様の方は徐々に動けなくなってきた。王様がとくに死んでいたことを確認したのち、眉間尺と黒い男の頭もともに瞑目した。

三頭の戦いが終盤を迎えると、宮中の人々はようやく号泣しはじめた。その後色々なことを議論したり、三つの頭顱を回収したり、識別の基準を考えたりしていた宮中の人はかなり努力をしていたが、結局結論は出せず、三つの頭顱を一緒に祭祀し金の棺に入らせることしかできなかった。

## 2. わるだくみ 搞鬼

魯迅の文章の厄介さは彼の独特の文体によるのだ。「新文化運動」の主将として旧文化を一掃し、現代的な文明啓蒙を中国にもたらすという簡単な構図で魯迅を理解するには無理がある、なぜなら彼は常に自分の文章にたくさんの穴や地雷などを仕込み、

いわゆる「挟槍帶棒」という悪名、肯定的に言えば「戦闘的な文体」を用いた。魯迅を嫌い人間にとってそういった文体は彼の悪趣味及び道徳的な劣悪になる所だが、魯迅自身はこのような指摘は「ブンブン」<sup>(5)</sup>（ハエの音）であり、叩いても意味がないと考える。

ハエを叩いても意味がない、しかしハエはとても煩いだから叩かなければならない。こういう矛盾の下で行動を取った魯迅はいろいろな悪巧みをおこない、文章の力を駆使して新生したばかりの中国の思想界の暗に繁殖した腐臭とハエを掃討する超人<sup>(6)</sup>となっていた。次々と敵の跡を嗅ぎ出し<sup>(7)</sup>、奇襲し、痛撃し、そして疲れを知らずに次の戦場に赴いた魯迅は論敵を作る専門において間違いなく喧嘩王として当時の文壇に君臨していたが、しかし実際のところで、言論界を支配することができなかった。革命、改良、保守、虚無主義のどれも味方にすることができず、個人主義者としても失敗する彼は「一遊魂」<sup>(8)</sup>としてその生々しくデタラメな世界で徘徊していた。

もちろん彼は自分自身のこの性格を変えようとしたいが、それも失敗し続けていた。<sup>(9)</sup>『阿Q正伝』を書いた「待死堂」<sup>(10)</sup>から1925年北京の『孤独者』まで、魯迅は自分の中にある「鬼気」、「毒気」<sup>(11)</sup>とずっと戦い、「自分を殺したい」と「人を殺したい」の対立の中彷徨っていた。しかし実際に彼は人を殺していない、自殺もしていなかった。いや、人を殺して食べたのだと彼は告白するかもしれない。なぜなら「人喰いは私の兄弟なのだ」<sup>(12)</sup>。

いずれにせよ、辛亥革命や新文化運動がすばらしい勢いで繰り広げていた「文明的な」景観のなか魯迅は反時代的に彼なりの戦いを延焼させた。新青年、新科学、新学問が旧来の「封建勢力」との文化権力の争奪戦の最中、魯迅は進化論的な潮流に逆らって古代の神話や故事の世界へ向かい、青年に対する指導より彼自身の「悪趣味」を満開させた。

「鑄劍」の最初の描写からもこの悪戯をよく見られる。「近ごろ彼は赤い鼻の人間にどうも気に喰わなくっている。だが今この尖った小さい赤い鼻を見ると、急に相手がかわいそうな気がしてきた。」<sup>(13)</sup>この赤い鼻の人間は当時疑古派の新歴史学を創始した歴史学者・顧頡剛<sup>こうげつこう</sup>のことを揶揄しているのだ。後者が興奮すると鼻が赤くなることや、どもるなどの生理的な欠陥<sup>(14)</sup>を以て、人身攻撃を冒す不名誉も惜しまずに魯迅は諸小説の中で彼だけ<sup>(15)</sup>を激しく皮肉していた。もちろん顧の方も反発して名誉毀損の訴訟まで魯迅を告訴したが<sup>(16)</sup>、それを無視し「鼻」、「紅鼻」<sup>(17)</sup>、「学者」、「鳥頭先生」<sup>(18)</sup>「歴史癖と考証癖がある胡適先生の門人」<sup>(19)</sup>など色々なあだ名をつけ、長年の間あちこちの隙間を挟んで顧を嘲笑してきた魯迅言動と悪巧みはとても不思議に見える。

魯迅に深く敵視されていた顧頡剛は、よく権力者に媚びる習性を持つ<sup>(20)</sup>面と人間関係の下手のことを除いてみれば、「私徳」には特に指摘できなさそう知識人の典型として見られている。しかし普通に「いい人」や才能ある学者として今再評価されている顧はなぜ魯迅にこんなに憎まれたのか。通

説では二つの理由が挙げられる。

①顧は胡適の学生として、魯迅の論敵の多くと友好あるいは同盟関係を持っていたため、胡適の「國故整理運動」のような考証学新学問に強く反発する魯迅に敵視されるのは自然である。が、この論点は魯迅が顧を反対あるいは嫌う理由になるが、魯迅が彼を深く怨恨していた理由にはならない。

②厦門大学に就職してした魯迅は最初から若年成名の顧の招聘に反対していた。その後同僚である顧に友人の招聘の推薦を求めたが、顧は面従腹背して院長に反対意見を言い、さらに彼の反対が却下された後、自分がこの件を促成した振りをした。のちに魯迅がこの事件の真相を知り、よって顧を面善にして陰謀を企む小人と判断した。次々と友人の仕事を紹介していた顧の行動も、魯迅に「反民党」の党閥の陰謀として見ていた。

二つの解釈を併せてみればある真相にたどり着くのだろうが、しかしいかに事件の真相を解明しても魯迅の行動に対する説明にはならない。魯迅が顧に怨恨を持つのは確かであるが、彼はなぜこのように、そこまで顧を攻撃したのか。なぜ顧への攻撃は堂々と彼が得意なエッセイの文体でなく、神話故事としてこっそり施されたのか？

この問題を解くために、1926年にその戦闘を堪能した思想家の魯迅のところではなく、彼の青年時代の思想に戻る必要がある。1908年、まだ日本留学中の魯迅は古文経学という清朝の儒学を集大成した革命思想家・章炳麟しょうへいりんのもとで、『説文解字』という

古文字学の授業に参加し、そこで「文学復古」<sup>(21)</sup>を軸線した革命思想に基づき「破悪声論」という漢文体の文章を発表した。「偽士当去、迷信可存」という要求を文中で宣言した。

今文経学の思想に基づいた『進化論』の訳本『天演論』に基づいた中国の維新は次第に失敗し、中国の局面はさらに混乱になってきた。それに対して章炳麟は維新改良派の根底にある「進化論」及び文明観の中途半端さ指摘し、「俱分進化論」という文を書いた。明治維新を真似し、西洋文明を丸ごと受け入れることによって改革を積み重ね、最後「大同な治世」に至ることは幼稚な理想に過ぎない、なぜなら論理と現実の面においては、積み重ねられたのは善だけではなく、悪も一緒に重ねてくる；いいことだけが成長するのではなく、悪い者も一緒に成長していく。故に政治的な善をもたらすために単に理想主義などの原理<sup>(22)</sup>を言って実際にいろいろ誤魔化していくのではなく、偽りや不義をまず排除しないと理想は保たれない。つまり「偽士当去」のことである。

章炳麟の授業を受けたのは魯迅だけではなく、顧頡剛も辛亥革命後に章の授業を聴講したことある。袁世凱の帝政運動の真ん中、康有為梁啓超などの今文経学の思想家が組織した「孔教会」は再び旧学の官学化に加勢していた。その時、軍閥と封建勢力に不満を抱えた顧頡剛は北京大学で新式な西洋学問を学び、康有為の論敵である章炳麟の授業にも参加した。今文家の邪論は全く大嘘であることと発覚し、自分は今文を

捨てて古文経学の路線に従って嘘ではなく「真相」を追求すべきだ、と顧頡剛が当時の気分を自述した。

そこから顧頡剛は、中国の歴史を、「神話」として懐疑し、大量な文献考証学を運用して、著名な古史弁運動をリードしてきた。古き良き時代というイメージは、累積した材料(ウソ)によって成立させたのだ。従って歴史文献の中には嘘だらけであり、科学的な論証で歴史を還元する研究に力を入れなければならない、という懐疑主義の歴史学ブームを、新文化運動の旗の下で起こした。

章炳麟本人はこの疑古的な歴史学に不満を持っていたが、しかし彼自身も歴史の潮に流された。胡適博士及び彼の新学術の同盟はすでに壮大し、大学を拠点にして天下布「文」していた。道徳価値と事実を分離させ、学問の独立王国を確保するために「(迷信である)鬼を駆除する(“捉妖打鬼”)」を目的にする國故整理運動など新学術は、民国政府及び西洋勢力の支持のした熱々に展開していた。<sup>(23)</sup>

上述の知識背景を踏まえてもう一度顧頡剛の行為を見ると前文の問題はもう答えられるのだろう。進化論的な文明観に基づき西洋の学術や思想を無防備に納入し、懐疑及び考証だけで「真相」を勝手に決め付け、大学を占拠して新文化運動の成果を専有して、独立の王国を作って批判から逃れるように膨大な資源を儲け、さらに独裁者の暴挙を容認して殺された学生の死体の上に、将来の「学術」を作ろうとする学者・顧頡剛の無実な様子を見ていくと、魯迅の胸中

の「鬼気」は直ちに沸き返ってくるのだろう。

大思想家の魯迅であっても、この学者を前にして下劣な悪巧みしかできなかった。

### 3. おにやく 鬼夜哭

『鑄劍』は魯迅の鬼気による復讐であることは明らかである。<sup>(24)</sup> 五月の運動<sup>(25)</sup>の潮時の指導者たちは明らかに「鬼」の退治を目標に掲げ、未開で封建的な「人喰い」勢力に宣戦布告していた。周氏兄弟も主将としてその戦いに加勢した<sup>(26)</sup>。科学、民主、理性、主義、実験、革命、文明、民族、さまざまな概念と制度が古き良き墓場に到来し、「鬼」、「ゾンビ」<sup>(27)</sup>、「幽霊」<sup>(28)</sup>など野蛮かつ愚かな国民性を彼らは駆除して改造しようとしたが、本物の帝国主義や軍閥などの権力者の前に敗北しつつあった。

いわゆる「五四退潮期」のなか、胡適らが「国故整理」に没頭し、周作人がだんだん「鬼趣」に染められ明清の小品文学と個人主義に耽けていた時に、魯迅は青年学生に囲まれ、崇拜され、そして懐疑されていた。目の前の死人、または内面から抑えられない鬼気の二重包囲の下の魯迅は「研究系学者」を揶揄って「五四」の革命成果を防衛しつつ<sup>(29)</sup>、自分自身に対する小さい革命を始ませた：1926年、北京女子師範大学の学生運動のため除名退学された許廣平は、指名手配された魯迅と一緒に、魯迅は厦門、許は広州へ南下した。二人が往来した手紙はのちに『两地書』として収録され、恋愛としての魯迅の自己革命の過程を記録した。

「私は「鬼怪梟蛇」<sup>(30)</sup>を愛せる。私はあいつに私を踏みつける特権を与える。」(両地書・一一二)という恋愛に至るまでの魯迅にとって超えなければならない障害としては、少なくとも二つがある。<sup>(31)</sup>まず、彼は若い頃に反抗ができず、母に騙されて結婚させられた自分を許せない、という啓蒙者としての自律・自慢を打ち砕かねばならない。自分一人で「四千年の債務を背負い」、「青年のために自己犠牲して将来の出口<sup>(32)</sup>を作ってあげる」という「人道主義」や「進化論」の拘束から自らを解放しない限り、自分より17歳下の学生と恋愛することはできない。

もう一つの障害は自分の極端な個人主義に対する恐れである。容赦なく強く自己批判している魯迅は、啓蒙者と超人になる憧れがある一方、自分の背後にあるニヒリズムをすでに察知していたかもしれない。自分のニヒル、矛盾及び狂喜にもたらした攻撃性を封印するには確かに個人主義、シニシズム、あるいは弟の周作人のような作家たちが提唱した「鬼趣」、「文人雅趣」、「清玩」、「小品文学」などが重要だが、二人以上が一緒にいると、上記のような個人主義は全て権力論の中<sup>(33)</sup>に回収・還元されてしまうのだ。

犠牲したい、そして犠牲することに躊躇する。魯迅の恋愛を妨げる個人主義の問題は単に個人主義の問題だけではなく、啓蒙者として理知及び理知に持たされた「個人主義」の厳格性に由来する。換言すれば、魯迅の「個人主義」には「人間」の存在さえ許されない、純粹で禁欲的な形而上概念

に囚われた哲学監獄だと考える。さらに言えば、このジレンマを調和する啓蒙主義的な倫理学自体も、実際に起きる革命と死人の前に失効する。

「むかし、文字が最初に造られた時、天は粟の雨を降らせ、鬼は夜哭きした。」<sup>(34)</sup>これは二千年前の人老の思想に基づいて文字の誕生及び文明の進化を批判した言葉である。文字や知識などに照らされた文明の世界は豊かに進歩していくが、文明・理知の剰余物である鬼・迷信の立場は確かに余儀なくされるのだろう。特に神話さえも「存在しない」と容易に断言される啓蒙時代に入ると、行き場がなくなる鬼たちはおそらく徹夜して号泣するのだろう。そしてこの声は常に灯下で筆を運ぶ人々の所に聞き届けられている。

筆を握って神話・歴史を書き出した古今の知識人たちの精神の裏には、おそらく「鬼」が潜伏している。鬼は彼らが鉄面を卸した夜に出没し、彼らの「批判」を覚えさせた。だが批判する言葉はまた言葉である。批判の言葉は言葉に取って代わることができない、結局批判する権力を権力、もっと言えは権力者に委ねるしかない、という道理は1927年の時点にまだマルクスを精読していない魯迅から見ると、新鮮ではなかった。

解剖刀を捨て置き筆の剣を拾い、「偽士当去、迷信可存」という復古主義の文学主張の下、文学革命という古い殺人剣を握り続けた魯迅は、見るにも飽きるほどの古書に宿る亡霊、そして周りに新しく作られた墓に囲まれていた。『狂人日記』のなかで

既に見届けた四千年の「人喰い」の歴史、そして目の前に繰り返される人喰いの現代劇、これらの惨劇を直面に昼夜思索しているからそのニヒルの循環から脱出したい。叫び、吠え、『呐喊』する、獣のように吼えて<sup>(35)</sup>人間の言葉を喪失した魯迅は、新鬼旧鬼の元へ逃げようとしていた。

「新社会は鬼を人間に転生するぞ。」<sup>(36)</sup>唯物弁証法を掌握した新社会の人は歴史の循環を悟り、その循環を利用して歴史を脱出していけると信じていた。もし脱出できるなら、もうはや鬼はいらなくなるが、魯迅はやはりその戸口で躊躇っていた。

「友よ、お前は私を疑っている。そうだ、おまえは人なのだ！おれは行こう、野獣と悪鬼をもとめて……」<sup>(37)</sup>「おれ」は人間なのか、鬼なのかよくわからない。しかし「おれ」は鬼たちのところへ向かった。孤独に包まれ、鬼たちが徘徊する陰湿な墓場に長く住み着き、「鬼気」に染められるのは当然のことであろう。

「鬼気」に包まれた魯迅の黒闇には一線の光（両地書・七三、八二）差し込まれていた。

1926年10月に完成された『鑄劍』は、来年の4月25日<sup>(38)</sup>より初めて発表された。まさにこの半年の間に魯と許の愛情火花が散っていた。その後、中国の大革命と個人の小革命という二つの戦線で作戦した魯迅は終に『鑄劍』において鬼の復讐、必殺の一剣をきらめいた：眉間尺、黒い人間の首を「人的な要件」にしてようやく鑄造された剣は、国王の命だけではなく威権、崇高さを全て消滅し、正真正銘な神剣となって

いく。

そのとき鬼は人間として転生しなかった。

人間が残した頭顱に宿る鬼は、神剣を成就する精霊として、

「君のために無私の光を万物に及ばせ、それで蟄虫は蘇り、萌草は出る」のである。

<sup>(39)</sup>

(つづく)

付記自作詩一首：

「蠟燭」<sup>(40)</sup>

鴻蒙萬古久不開，剖心盜得天火來。  
燒書無計存炬種，焚身有意捐廢骸。  
古墓光明鑿一線，寒山木葉拾作柴。  
何似步兵厨余裏，石家蠟燭未剪裁。

#### 【次回予告】

揣してこれを鋭くするは、長く保つ可からず。鑄造した剣は終に折れてくる。

国民党と共産党の決裂は挽回できない局面、戦場を変えなければならない。

左翼作家の連中が群がる上海のなか各式な動きが蠢動している。

ビークターンを迎える、魯迅の戦法革新！

注

(1) 白樂天（唐）『鴉九劍』：

歐冶子死千年後，精靈暗授張鴉九。鴉九鑄劍吳山中，天与日時神借功。

金鉄騰精火翻焰，踴躍求為鑄錐劍。劍成未試十餘年，有客持金買一觀。

誰知閉匣長思用，三尺青蛇不肯蟠。客有心，劍無口，客代劍言告鴉九。

君勿矜我玉可切，君勿誇我鐘可剗。不如持我決浮雲，無令漫漫蔽白日。

為君使無私之光及萬物，蟄蟲昭蘇萌草出。

(2) 『吳越春秋・闔閭元年』：「干將作劍，來五山之鐵

- 精，六合之金英。候天伺地，陰陽同光，百神臨觀，天氣下降，而金鐵之精不銷淪流，於是干將不知其由。莫耶曰：「子以善為劍聞於王，使子作劍，三月不成，其有意乎？」干將曰：「吾不知其理也。」莫耶曰：「夫神物之化，須人而成，今夫子作劍，得無得其人而後成乎？」干將曰：「昔吾師作冶，金鐵之類不銷，夫妻俱入冶爐中，然後成物。至今後世，即山作冶，麻經蓑服，然後敢鑄金於山。今吾作劍不變化者，其若斯耶？」莫耶曰：「師知燦身以成物，吾何難哉！」於是干將妻乃斷髮剪爪，投於爐中，使童女童男三百人鼓囊裝炭，金鐵乃濡。遂以成劍，陽曰干將，陰曰莫耶，陽作龜文，陰作漫理。」文中は私訳。
- (3) 馮渝傑「鑄劍、劍解與道教身體觀——「人劍合一」の知識考古」『人文雑誌』2019年第2期に参考。
- (4) 三・一八事件、反帝国主義デモ運動として軍閥に弾圧、「民国以来、もっとも暗黒なる日」と魯迅が述べた。魯迅（相浦杲訳）「劉和珍君を記念する」『魯迅全集4』学習研究社1984年310-317頁。
- (5) 魯迅（竹内好訳）「戦士とハエ」『魯迅文集3』筑摩書房1983所収。  
「戦士が戦死したとき、青蠅どもがまっ先に発見したのは彼の欠点と傷痕であった。貪り食いついて、ブンブンと叫びながら、得意になり、死んだ戦士よりももっと英雄のつもりである。だが戦士はもう戦死している。もう手をふって彼らをはらいのけはしない。そこで青蠅どもは一そうブンブンと叫んで、自分たちこそが不朽の声だと思ふ、なぜなら戦士以上にずっと彼らのほうが完全であるから。」
- (6) 若年の魯迅がニーチェに深く影響されたという。
- (7) 『爾雅・釈獸』：牝狼其子獺（その中）絶有力（者は）迅。魯迅若年が古文経学の章炳麟に古文字学を学んだこともあり、「狂人日記」執筆する際に「魯迅」というペンネームをつけた裏にはこういう「狼の子」の側面もあるのではないかと考える。
- (8) 魯迅（竹内好訳）「墓碑銘（墓碣文）」『魯迅作品集2』筑摩書房1966 p52
- (9) 以下は王曉明『魯迅傳：不能直面的人生』三聯書店2021第6-11章に参考。
- (10) 魯迅が袁世凱の帝政運動の時に使っていた号「埃（待つ）堂」。弟の周作人の解釈によるとそれは古人の「待死堂」に相当するものだとされる。
- (11) 「致李秉中（1924）」という手紙による。『魯迅全集11』（2015版 以下同版）

- (12) 『阿Q正伝』による。
- (13) 魯迅（竹内好訳）「鑄劍」『魯迅作品集2』筑摩書房1966 p278
- (14) 魯迅からみると彼の吃りは病気ではなく、それは彼がいつも陰謀を企んでいるからのだという。顧は自身の口頭の表現能力の低さについて、幼時に無理矢理にたくさん勉強させられて「性霊」を失ったものであると自述した。
- (15) 魯迅自身は後の左翼論戦で侮りの罵るような人身攻撃を「戦闘ではない」と否定した。ここ顧の人身的な特徴を漫画化にして描写することは確かに風刺に当たるが、Caricatureの技術と殺伐的な攻撃の間には些か距離があると考えられる。
- (16) 顧も論戦と口論に熱心のタープだが、魯迅と正面对決をせず直接告訴を取ったことも不思議に見える。
- (17) 「致章廷兼（1927）」：「『史記』を書いた、漢朝の大犯人司馬遷は宮刑を受けてペニスを失い、その恨みかけられ文句の文章を付けていたが、その文は尚短い。今の学者はただ鼻が赤い訳で、序文をそこまで長く書いたことは、さすが所謂文豪ということや。」顧の代表の話題作『古史弁』の序文として、平岡武夫訳の『ある歴史家の生いたち：古史弁自序』岩波書店1987がある。
- (18) 顧の字の篆書は鳥偏から始まる。魯迅は『理水』という歴史小説で当時の色々な学者を風刺する際、顧は可笑しい鳥頭先生として描かれ、滑稽な言動を表すことで彼の学説と性格を併せて酷く皮肉した。
- (19) 『阿Q正伝』の序の中、阿Qの名前の考証のところに揶揄した。顧は魯迅の攻撃を私怨や嫉妬として受け止めている。余英時が顧の晩年の日記を整理する時に、「私もなんで奴らの紹興人にこんなにいじめられってきたのか全くわからない。最近彼の著作をよく読んでいくと、多分私の方が学識を持っている、彼はそうではない、だから魯迅は私の才能を嫉妬しているのだと分かった」という話を発見したといわれる。
- (20) 国民党と共産党政権の交代にもかかわらずずっと大学で自分の研究を進まれることは彼のご機嫌取りの技術を反映している。カントが「啓蒙とは何か」で書いたような、「あらゆる公的な場面で自由と理性を発揮し、ただし服従する」という名言は連想される。

- (21) 復古主義の新文化運動（清末）と反復古主義の新文化運動の併存に注目した、林少陽『鼎革以文・清季革命与章太炎「復古」的な新文化運動』上海人民出版社 2018 p381 - 419 を参考に以下を述べる。
- (22) 章炳麟の文脈で言うと、国家主義と世界主義（無政府主義）のことを指す。
- (23) 王汎森『中國近代思想與學術的系譜』三聯書店 2018 p459 に参照。
- (24) 丸尾常喜「復讐と埋葬 - 魯迅「鑄劍」について」『日本中国学会報』46 卷 1994 p195-209 に参照。
- (25) 1919 年パリ講和会議のベルサイユ条約の結果に不満を抱き発生した、サイエンスとデモクラシーを掲げて中華民国の北京から全国に広がった抗日、反封建、反帝国主義を掲げる学生運動、大衆運動。五四愛国運動、五・四運動とも表記される。
- (26) 丸尾常喜『魯迅：「人」「鬼」の葛藤』岩波書店 1993 p267 - 273
- (27) 旧学の經学内部からも批判を興していた。顧頡剛に經学的な知識を提供していた周予同は經学の立場から政府が宣伝した「伝統」を強く批判し、經学が現代政治における作用を經学内部から否定した。周予同（朱維錚 編）「僵尸の出祟——异哉所謂学校読経問題」『周予同經學史論』上海人民出版社 2010
- (28) イプセンの『幽霊』（Gengangere,）は周作人よく語っていた作品である。周作人はさらに「流氓（無頼）鬼」と「紳士鬼」を区別し批判及び自己批判をしていた。
- (29) 厦門大学及び後中山大学に就任していた魯迅は何度も北京の時代のように学生運動を支援しようとしたが、学校と同僚から支持得られずに失敗した。
- (30) 許のことを指している。許は以前魯迅にたいして「小鬼」などを自称していた。
- (31) ここは前掲丸尾が『鑄劍』についての解説に参照。
- (32) フーコーがかつてカントの「啓蒙とは何か」を読解する際に「出口」としての啓蒙を言及した。この言葉からもう一つ連想されたのは、近代を「超克」という概念がある。その間の差に注意を払う必要があると考える。
- (33) 周作人もよくこのように享樂個人主義と批判されている。
- (34) 『淮南子・本經訓』：「昔者倉頡作書而天雨粟鬼夜哭。」
- (35) 1925 年の小説『孤独者』の最後、「私」は狼のように吼えながら野原で走り出した。
- (36) 1945 年の革命バレー・白毛女により周知された言葉である。
- (37) 魯迅の散文詩「失われたよい地獄」（1925）丸尾前書 p276 の訳文による。
- (38) 上海の四一二事件を皮切りに国民党は共産党に対する「清党」という武力迫害を始めた。4 月 15 日により広州事件が爆発し、魯迅などが大学に対して学生を救援しようと要請したが、学校の消極的な対応に不満して最後辞職まで至った。
- (39) 前記の白樂天の詩。
- (40) (自注) 鴻蒙：宇宙が始まる前の状態をいう。剖心：プロメテウスの故事。炬種：トーチの火種。捐：寄付。鑿：穴を開けること。寒山と拾得という二人の隠居詩人の典。歩兵：西晋の阮籍という人物、竹林の七賢の一人である。歩兵官倉の酒を楽しむために校尉の職を拝領したという逸話により阮歩兵と呼ばれる。石家蠟燭：西晋の石崇という官僚かつ大富豪、奢侈を競うために蠟燭でご飯を炊いた物語がある。

(やお いみん 言わずもがなの文人趣味  
 研究家)